日本クリスチャン・アシュラム連盟

日本アシュラム

開心
静聴
充満
献身
奉仕

United Christian Ashrams of Japan　秋季号

神に明け渡す道

四国アシュラム委員長　宇都宮　充

一

アシュラムではどこでも開会礼拝に次いで「開心の時」がもたれる。これは最後の『充満の時』と共に最も大切な瞬間である。アシュラムに集ってきた各自が何の願望にニードを以ってやってきたかを互に告白し合うのである。私も度々アシュラムに参加してその告白をきいたがもっと神の聖霊に満たされたいこととどうすれば不徹底な信仰を捨てて神に満たされ恵まれた活ける信仰が得られるかを求める声がすべてといってよいほど多い。彼らは「イエスは主なり」と信じて自分を神に明け渡し罪を懺悔して自由自在の信仰生活に入りたいと願う。我欲と我執から脱却して人を愛し主に仕えることを願い求めてはいるが容易にぬけきらない自分であることを認識する。つまり自我の放棄ができ難いところに人間の弱さがあり、信じても信じ得ない苦悩がある。

二

どこまでも自分自身が大きな問題をもってある。私たちにとって一番近いのは自分である、しかも自分ほど分らないものの制し難いものはない。よく自分のことは自分が知っておると言う人があるが、これは強がりを言っておるに過ぎない。人は自分をどうすることもできない悲劇的な人生ドラマの演出者でしかあり得ない。

使徒パウロは、

「善をしようとする意志は、自分にあるが、それをする力がないからである。すなわちわたしの欲している善はしないで、欲していない悪は、これを行っている。わたしはなんというみじめな人間なのだろう。だれが、この死のからだから、わたしを救ってくれるだろうか。」（ロマ七ノ一八、一九、二四）

と二律背反する自分に死の苦斗を経験した。しかし「わたしたちの主イエス、キリストによって神に感謝すべきかな」（ロマ七ノ二五）と叫ぶようになって初めて神にあけ渡した自由の喜びに到達した。他の言でいえば「生きているのはもはや、わたしではない。キリストが、わたしのうちに生きておられるのである。」（ガラテヤ二ノ二〇）ということで、自我は「キリスト我」によって統一され十字架の死と生を通して自我を明け渡し変通自在の信仰の境致に生きることができたのである。

三

そこで人は自分の負っている自我を滅却して新しい真我（キリスト我）に生きるまでは全きを得ない。母の胎を出てから人格の中心となるものは自我である。この自我概念は寧ろ母の胎内から初まるといってもよい。乳児期に養育者が拒否的な態度で幼児を取扱うと他人に対して敵意をもち（サリバン）愛されたことがないと決して人を愛する人とはならない。（フロム）人は常に欲望や衝動を抑制しつつ社会の理想目標に適応するように自我構造の再体制を計りながら生涯を歩むべきである。然も永久に未成熟であり未完成であるが、謙虚にして真摯な自己啓発に進むことが肝要である。

それはまたキリストを信ずる信仰生活に於ても同じことである。主に罪を贖われ聖霊の能力と導きとによらないでは自分を主に明け渡して感謝の生活に入ることはできない。一度明け渡した積りでいても何時の間にかまた暗い影がさし心が乱れてくる。『毎日主へのあけ渡しをせよ』とスタンレー・ジョーンズ博士は教えておる。アシュラムはその修練をする道場である。人と人との断絶の激しい今日の世界には対話の必要性が高調されダイアロギユウを通して人間関係の回復が唱道されておる。人間を中心とした新しい神学が流行し聖霊の働きを軽親して祈りの尊さを見失っておる時、アシュラムこそは主の前に於ける霊的ダイアロギユウであるところに大きな意義がある。そこで自己を捨て自己を啓発し神に明け渡して主につける自分となることである。

て、常に新しい家族の参加を

ている。

発行所
東京都
江古田
海老
高
定価

聖霊と異言の賜物(三)

スタンレー・ジョーンズ

○

あのしるしのリストと平行して、次の聖句がある。「しかし御霊の実は、愛、喜び、平和、寛容、慈愛、忠実、柔和、自制である」(ガラテヤ書五章二二)。この一つ一つは全て道徳的である。どちらのリストが真実な神の霊感を示しているか。クリスチャンの良心は「愛に初まり、自制に終るリストこそ、神の霊感によるリストである」と、ためらわずに言う。そしてこのリストの全ては主イエスに当てはまる。彼はそれら全てを具現化されたのである。

○

ここで「主イエスは聖霊を持っておられたか」という質問が起る。答は然りである。その上彼が異言を語られたということを追加する必要があるか。私は彼の有りのままを望む。もし主イエスが聖霊を持ち、異言を語らなかったのなら、私も聖霊を持つことができて、異言を語らない彼のようでありたい。仮りにこれら御霊の九つの実を具体化したとしたら、あなたはどのような人格となるだろうか。最上のタイプである。また仮りにマルコ伝十六章十七の五つのしるしを具体化したとしたら、あなたはどんな人格であろうか。蛇をつかんでもかみつかれず、毒薬を飲んでも死なないことを演技する宗教的な演芸家のタイプとなるであろう。なぜ新しい異言を語るというしるしだけを取上げ、蛇をつかんだり、毒を飲むことはやらないのか。なぜ五つのしるしを全て取上げないのか。全てがだめになるからである。

○

今日ある人々が聖霊に満たされて、その経験の一部として異言を語ることを疑うことができようか。私はあり得ると信じる。しかし必然的にではない。何百万人もの人々が聖霊に満たされたが、異言を語ることはなかった。更に次の事を言わなければならない。聖霊の降臨が異言を伴うことを教えられた所でだけこの現象が起きている。私は全大学が回心したリバイバルに行ったことがある。全ての学生と付近の町から集まった人々は講堂に入る前に、聖霊の力に打たれ、回心させられた。しかも誰一人異言を語らなかったのは、なぜか。教えられなかったからである。聖霊の充満に伴なうしるしは「愛、喜び、平和、その他」であると教えられた結果、人間が改変したのであった。

○

前記のような現代的な異言の表明においては、教えられるだけでなく、しばしば誘導されている。求道者を一つのグループが囲んで皆が彼の上に手を置き、求道者は時にはその流れを初めるために何か知っている異国語を言うように強制される。或は彼のあごをゆるめて、舌をぶるぶるさせるように指示される。或はイエスの名を何度もくり返すように求められ、続いてどもり初めるまでにどんどんと速度を早めさせられる。

『さあ、あなたはできるようになった。聖書は、我どもりの唇によって彼らに語らん、とあるから』と告げられる。

○

それ故に異言の用法が常に区別されたことは疑いもない。アフリカのウガンダの大リバイバルで医療宣教師チャーチ博士は、神に大いに用いられた感動力であった。数千人が回心し、村々や地区全体が改変した。チャーチ博士は異言を語る他のグループの所へ行き帰ってきて、ウガンダ・リバイバルで異言を語り初めた。アフリカ人の指導者たちは彼を呼んで、『このことはあなたを誘らせてそのために人々を分裂させるだろう』と言った。彼は彼らの方が正しいことを知って、異言を語ることをやめ、生れ変る人々を造る本来の仕事に専念した時、リバイバルは力と一致とをもって進展して行ったのである。

○

アシュラムにおける我らの態度もこれである。我らは浸礼派、非浸礼派、などあらゆるクリスチャンを歓迎するように異言を語る人々をも、我らの交わりに歓迎する。なぜなら、聖霊に充満せる人格の模範は、主イエスだからである。我らは聖霊に満され、彼のように成ることを願う。彼は我らの一致の中心であり、聖霊に充満せる生活の模範である。

アシュラムの五大原則(三)

聖霊の導きと充満

海老沢宣道

アシュラムは「イエスは主である」との告白を生活化するために、(これは今日の教会に欠けた点と思われる)、使徒時代の原始教会に学び主のみもとに共に集まり、ひたすら御言に聞き、信徒の交わり(コイノニヤ)をなし、共に恵みを分ち合い、祈をする集いである。従てアシュラムは最後の、「充満の時」になるまでもなく、最初の「開心の時」から既に聖霊の導きに依存するものである。アシュラムの成否は聖霊の浸透の有無にかかっていると言っても過言ではない。「開心の時」に真剣に求めた者に、天の父が「充満の時」に聖霊を下さらないことがあろうか。

朝の静聴、祈の細胞、福音(恵み)の時、労作、ファミリー、証しの時、沈黙の時、医しの時、密室の祈り、など全てのプログラムを通じて、聖霊は一同を静かに導きつつ造り変えて行く。誰にどんな変化が起っているかは知られないが、最後の「充満の時」までには必ず主イエスの贖罪愛が一同の心に植えつけられ、育ってくる。我欲に対する聖霊の勝利を体験して、溢れる喜びと感謝に満たされてくる。ジョーンズ博士が「九五%は晴れやかになり、造り変えられる」と言ったことは大いに考えさせられる。これは最も大切な時であり、その変化はすばら

アシュラムの五大原則
(一)　キリストへの明渡し

アシュラムと私

山根可二

「アシュラム」とは何のことか？　キリスト教の別派とまで思わないまでも、総動員伝道とか、あるいは救世軍とでもいえば判りやすいが、何をするのかとよく尋ねられる。

答は簡単である。今日まで語られてきたキリスト教と特別に変りはない。訪問伝道も総動員伝道も皆ふくまれている。

スタンレー・ジョーンズ博士が永年の印度伝道中に、ある修練の方法を見て、これにキリストが入ればと思われ、クリスチャンのアシュラムを初められた。つまりこれは教派、教団を超えてキリストと自己との楽しい結合を体験する運動でこの生活をしてみれば、その重要性がわかる。

幼児が道を一人で歩いているのを見れば、誰でも「危い！」と思う。しかし、母親の手にしっかり握られ、自分を完全に母にゆだねて行くとき、身の安全だけでなく、母は間違いなくわが家に連れ帰る。幼稚な私の歩みは、ここからアシュラム生活が始った。

次に一人歩きができるようになると、子供は母親の眼界を出る。その言に従わないでも危険を知らない。聖書が少しわかるようになってから、静聴を怠る人はこの危険を知らない。他人に危険を与えていることもわからない。先日もある姉妹が証しをされた『今までは聖書を読んでも御言がいのちとなってとどまらなかったが、静聴の指導を受けた今はそれにより主にある生きた生活になった』と。

子供も中高生くらいになると、もう自由になったと思う危険がある。まだまだ親の指導と学校の教育による最も大切な時である。アシュラム生活において、静聴の結果、聖霊の啓導により、それぞれ神支配のもとに全き生活に歩むこと、それが当然のことであるという理解が、自分のものとなってくる。

このように神支配にゆだねて歩むならば、聖霊の充満に与ることは間違いない。長年教会に出席して、信仰生活をしている積りでも、聖霊の充満がなければ、主の道を正しく歩んでいるとは言えない。然し、失望することはない。自分がどこでストップしているのか、そこから前進すればよい。主は毎日共に歩まれる。

充満ということは、コップの水がフチまで一杯になる状とは違う。大滝の水が何千年流れてもつきない状態のことで、教会への奉仕と伝道は、そこから必然的に御愛の主の御助けによってさせて頂けるのである。

サタンの誘惑

増井芳雄

主イエスは二回、サタンの誘惑に抵抗された。一回目は福音の宣教に先だつ荒野の誘惑であり、二回目は十字架への道を歩まれつつあった時、愛する弟子ペテロの口を通してささやかれたサタンの誘惑であっただろう。

日本キリスト教団は第16回総会以来このサタンの誘惑に悩まされている。万博問題、東神大紛争、真理問題をめぐる闘争は、まさにサタンの仕掛けた誘惑である。

イエスはすべての誘惑を神の言をもって撃退された。『サタンよ、去れ』といわれ、御自分がメシヤであることを主張された。イエスはそうされるのに際して今日問題提起者が主張するような一般的なまたゼロタイ的、革命的なメシヤ観は間違っていることを示そうとされた。イエスは人々との戦いに加わる前に神の臨在を求められた。サタンに抵抗されたイエスの勇気とイエスにある真理を聖書に学びたい。イエスは生ける臨在である。

「イエスは主である。」イエスは全キリスト教会の主である。日本の教会からサタンの誘惑を撃退する力は祈りである。聖霊の賜物をうけないで宣教はできない。アシュラムこそ今日の教会を強め、日本を救うキリストの戦いである。第五回道南地区アシュラムは10月26～28日谷本清牧師を迎え創立百年を記念して新装成った函館教会で開催されることに決定した。ご加禱を乞う。

（第五回道南アシュラム実行委員長）

国際ミニ・アシュラム中止

前号に予告したが、都合により中止となりました。

（三）聖霊の啓導と充満
（四）神の国の体験と献身
（五）教会への奉仕と伝道

しい。

「充満の時」を英語では「オーバーフローイング」と言う。満ちるだけでなく、溢れ出ることである。「信じる者はその腹から生ける水が川となって流れ出る」と主は言われた。ここで一同は今回のアシュラムで受けた恵み、自分に起った変化、新しい決断に対する感謝を主イエスの御前に告白せずにはおれなくなる。

ここで注意したいことは、充満の時が最後に守られるので、他所でよくするように委員や指導者たちに感謝したい所であるが、アシュラムの指導者は主イエスの他になく、その御霊の導きに対してのみ、感謝すべきである。

そしてむしろ各自の受けた恵み、変化、決断が更に助け主なる御霊の導きによって、翌日からの家庭生活、教会生活の中で実行されるよう、お互いに心を尽して祈り合う。つまり「充満の時」で終るのでなく、それから主の御霊に服従した真実の信仰生活へと再出発する時である。アシュラムに対する一般の理解はまだ不十分だが、これはあくまでも教会本来の使命に、よりよく仕える主の弟子として送り返す働きであることを、ぜひ参加して認識されたい。更にこれは個人体験に止まらない。聖霊を受けた以上、地の果まで、主の証人として前進する信徒を産み出す。伝道に出かけた『弟子たちは益々喜びと聖霊に満たされた』（使一三）ように『御霊に導かれる神の子』（ロマ八）となり『御霊の実』（ガラ五）を豊かに結ぶ教会となるであろう。

祈りと準備の整った
日本各地のアシュラムへ
あなたの参加を期待する

連盟に加盟の八地区アシュラムは祈とよい準備が整って、いよいよ九月に二つ十月と十一月に各三つの集会が開かれることになった。各地に聖霊の降臨を切に祈る。今年も貴兄姉の参加を待つ。

第八回中部アシュラム
時・九月二日(月)、三日(火)一麦教会
所・名古屋市千種区猪高町一社瓶ノ井
協力者・高瀬恒徳理事長、同夫人の他、地区の内村、原田、尾城、毛戸の諸師
連絡先・安田教会内、内村サムエル
名古屋市昭和区安田通二―一七

第九回四国アシュラム
時・九月二一日（土）～二三（月）
所・徳島県鴨島町元町、鴨島兄弟教会
協力者・山根可弌理事の他、地区の宇都宮、戸田、岩井、伊藤、黒田、岡村、久保、唐渡の諸師
連絡先・松山済美会館・宇都宮充
松山市二番町三―一〇―七

第十三回関東アシュラム
時・十月八日（火）～十日（木）
所・青梅線古里駅十分、奥多摩福音の家
主題聖句・み言葉がうち開けると光を放って無学な者に知恵を与える（詩篇一一九の一三〇）
協力者・高瀬、岡田、山根、大久保、帆足、中村、満丸、横山、海老沢の諸師
連絡・西川口教会内、横山義孝
川口市西青木一―二五―二一

第四回東北アシュラム
時・十月十一日（金）～十三日（日）
所・蔵王荘、上ノ山市葉山温泉保養所
主題・あなたが今対決している問題
協力者・高瀬理事長、村上東他委員
連絡先・山形本町教会内アシュラム委員
山形市本町二丁目一―二四

第五回道南アシュラム
時・十月二六日（土）～二八（月）
所・函館教会、函館市元町三一―一九
協力者・谷本清理事、白川、植村、増田の諸師
連絡先・函館千歳教会内、白川鄭二
函館市松蔭町九―六

第十三回中国アシュラム
時・十一月三日（日）～五日（火）
所・カトリック修道院
協力者・高瀬理事長、谷本、他の諸師
連絡先・広島流川教会内、谷本清
広島市上幟町九―一三

第九回関西アシュラム
時・十一月四日（月）、五日（火）
所・シオン・ロッジ、吹田市千里山五丁目二六―一一
協力者・中路副理事長、中島、後宮、辻中、他委員の諸師
連絡先・扇町教会内、中路嶋雄
大阪市北区神山町七九

第九回九州アシュラム
時・十一月二一日（木）～二三（土）
所・福岡市早良町、千石荘
協力者・榎本保郎、山本他委員の諸師
連絡先・門司大里教会、山本繁夫
北九州市門司区藤松一―二一

以上何れの地においても主の御臨在の下、大いなる聖霊の恩化に浴せられ、再献身者の起るようにと切に祈る。

アシュラムの火を全国に

賛助会員を募集中

申込は地区委員会に

主イエスへのサレンダー、教会の中に不可欠のコイノーニヤ、神の国の体験を失っている日本の教界に、それらをリバイブするアシュラム運動に一度参加された兄弟姉妹よ。この霊火を全国の教会に点火するために、アシュラムの賛助員となって下さい。参加費や宿泊費の他に、年一千円以上の賛助献金を願います。その全額を地区と連盟とで折半し、全国的運動を展開します。賛助員は各地区の名簿に記録し、年間を通じて諸種の印刷物を送り、連絡を取り、祈りの友として共に励むことができます。あなたのお申込みを八地区の委員会はお待ちします。

創始者ジョーンズ博士記念

三大事業への献金募集中

日本アシュラム兄弟の協力を

故スタンレー兄弟にアシュラムを教えられた世界の友は、生前希望された仕事の中左記三つを記念事業として実行することに決定、予算六〇万ドルを計上した

▼第一、世界アシュラム・センターをガリラヤ湖畔に建設。
▼第二、アシュラム未開国への活動費。
▼第三、発祥地サト・タルのセンター強化とクララ・スエイン病院の増築。

日本連盟もこれに参加、目標を一万ドルとした。

◎送金方法　振替　東京　五〇二五九（名儀、江古田教会）利用、「ジョーンズ博士記念献金」と明記御払込み下さい。

記念事業献金報告（五）
（一九七四年六月―八月）
▽一万円　一麦教会（中部地区）
▽一万円　代官山教会（関東地区）
▽五千円　横山　義孝（関東地区）
合計（三口）金二五、〇〇〇円
累計　金一、二〇四、四〇〇円

『アシュラムとは何か』（30円）
『一日アシュラムの守り方』（同）
『地区アシュラムの手引』（50円）
参加者が何度でも読むべきもの
▽ アシュラム・ピン一個一五〇円
『イエスは主なり』のマーク
○ アパ・ルーム
（隔月刊静聴の友）百円

▼アシュラムとは故スタンレー・ジョーンズ博士がインドの退修方式を取り入れて創始されたキリスト教の新しい祈禱生活のことである。

所
中野区
3-19-12
教会気付
集人　宣道
行人　恒徳
部　30円